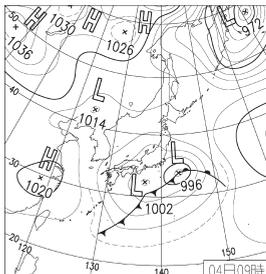


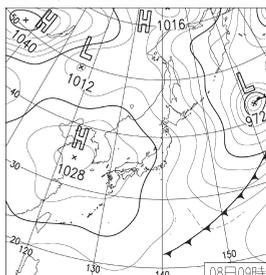
日々の天気図

— No. 206
2019年3月

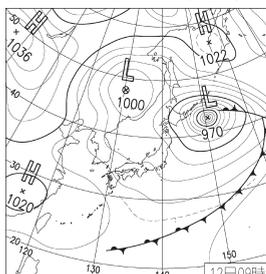
- ・14日、低気圧の通過により秋田県で暴風雪、屋根剝離や鉄道運休等。
- ・21日、大潮の満潮と副振動が重なり、長崎検査所で過去最高潮位に。
- ・上旬、北日本の旬平均気温が年差+3.3℃で、高温の記録を更新。
- ・中旬、サイクロンがモザンビークに上陸、豪雨・洪水被害が発生。(気象庁予報部予報課)



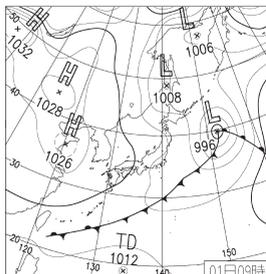
4日(月)日本の南を低気圧通過
低気圧や気圧の谷の影響で西日本～東北は雨や曇り、山沿いは一部で雪。北海道は概ね晴れて気温が上昇し、最高気温が4月上旬並の所も。神戸市、彦根市ウグイス初鳴。



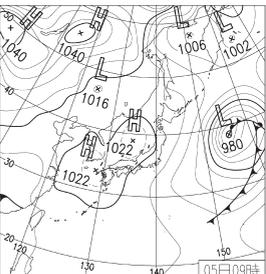
8日(金)鹿児島市でツバメ初見
黄海の高気圧が東へ移動し、夜には西～東日本を緩やかに覆う。午前中は寒気の影響で近畿～東北の日本海側を中心に所々で雨や雪。沖縄は気圧の谷や湿った空気の影響で雨。



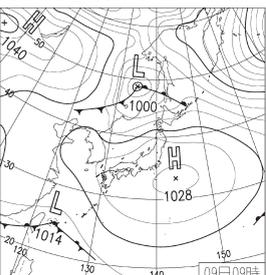
12日(火)北日本太平洋側大しけ
発達した低気圧は千島近海に。北日本は午前中を中心に雪や雨で、北海道ではふぶきの所も。山陰～北陸は低気圧が接近し所々で雨。最高気温は東日本で4月中旬～下旬並。



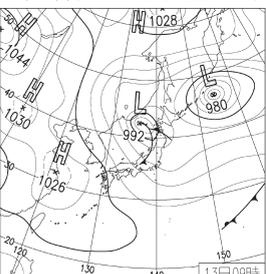
1日(金)高気圧張り出す
全国的に晴れた所が多いが、気圧の谷の影響で関東や東北日本海側は所々で雨。全国的に気温が上昇し、最高気温が4月中旬並の所も。新潟市ウメ開花、銚子市ウグイス初鳴。



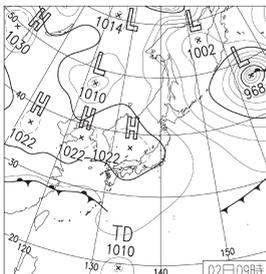
5日(火)各地でウグイス初鳴
高気圧に覆われ全国的に晴れたが、東日本は気圧の谷の影響で朝まで雨。西日本は湿った空気の影響で夜には所々で雨。長崎市、松江市、富山市、熊谷市など全国8市でウグイス初鳴。



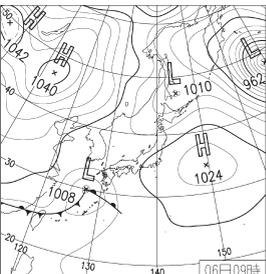
9日(土)関東地方で春一番
高気圧が広く本州付近を覆い、西～東日本は概ね晴れ。南西諸島は前線や低気圧の影響で雨。北海道は寒冷前線が近づき夜は所々で雨や雪。北日本は最高気温が4月下旬並の所も。



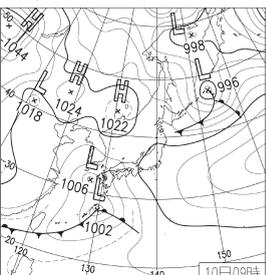
13日(水)徳島・和歌山県で震度4
低気圧や前線、寒気の影響で日本海側を中心に雨や雪。中国山地でも広島県高野で9cmの積雪。九州北部や太平洋側では日中は概ね晴れ。新潟県松浜で最大瞬間風速31.4m/s。



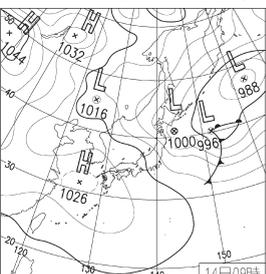
2日(土)西日本は天気下り坂
沖縄～西日本は前線や湿った空気の影響で次第に曇って、九州や四国は午後には雨。東日本や東北は日本海の高気圧に覆われ晴れ。北海道は寒気の影響で所々雪。北海道で震度4。



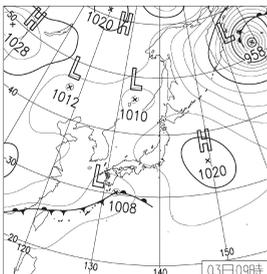
6日(水)仙台市でウメ開花
前線を伴った低気圧が発達しながら東シナ海から四国の南に進んだ影響で、西日本～東日本は雨。北日本は気圧の谷が通過し所々で雨や雪。広島市、甲府市でウグイス初鳴。



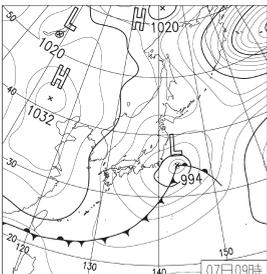
10日(日)2つの低気圧が接近
前線を伴った低気圧が日本の南を北東に進み、別の低気圧が九州を通過。南西諸島や九州の雨は夜には関東まで広がる。宮崎県都農では43mm/1hの激しい雨となり海上はしけ。



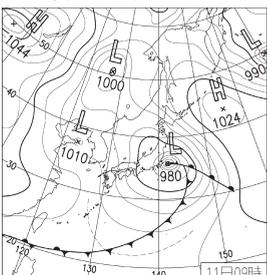
14日(木)下関市でヒバリ初鳴
北海道付近の低気圧や上空の寒気の影響で、山陰～北陸と北日本で雪や雨。西日本～東日本では太平洋側で晴れや曇り。南西諸島は晴れたが気圧の谷の接近で午後には次第に曇り。



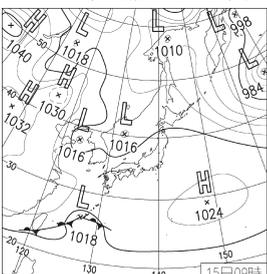
3日(日)周期的に低気圧が通過
前線を伴った低気圧が発達しながら日本の南を東進。沖縄～西日本、東日本太平洋側で雨。北陸～北日本は一部を除き晴れ。沖縄県では波留間で最高気温28.4℃など。夏日に。



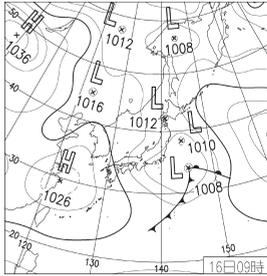
7日(木)低気圧が関東の東へ
低気圧や上空の寒気の影響で西日本～東北は広く雨や雪。大気の状態が不安定となり雷を伴う所も。沖縄や北海道は晴れや曇り。朝の冷え込みは強く、最低気温は全国的に4月並。



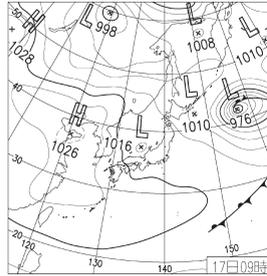
11日(月)東北の被災地に春の嵐
低気圧が東海道沖から三陸沖へ進み急速に発達。岩手県の太平洋側を中心に大雨となり、岩手県普代の日降水量113mmは3月の1位更新。北海道えりも岬で最大瞬間風速41.3m/s。



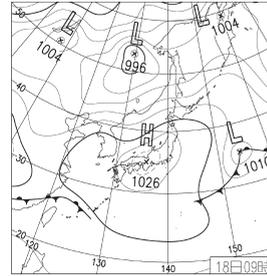
15日(金)強い寒気が南下
北日本は低気圧が接近。また西～東日本の上空約5400mには-30℃以下の寒気が流入。午後には西日本～東北で雨や雪となり雷を伴う所も。沖縄・奄美は低気圧の影響で曇りや雨。



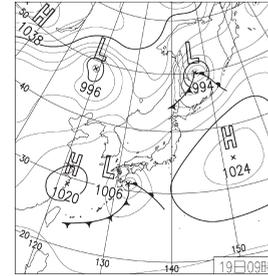
16日(土)天気は回復へ
 沖縄・奄美は高気圧に覆われて奄美中心に晴れ。西日本～北日本は低気圧が通過し、夕方にかけて雨や雪が降ったが、その後は西から高気圧が張り出し次第に晴れ。



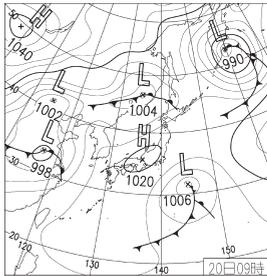
17日(日)山陰～北陸は雷雨
 低気圧の接近で中国、四国、近畿、東海、北陸は雨や雪。大気の状態が不安定となり雷を伴う所も。北日本は気圧の谷や寒気の影響で所々雪。沖縄や九州は高気圧に覆われ晴れ。



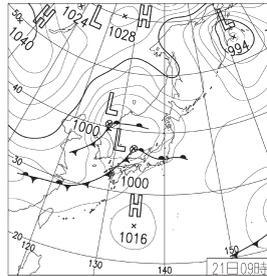
18日(月)西から天気下り坂
 午後は高気圧の中心が日本の東へ移動し、東シナ海では前線上に低気圧が発生。沖縄～四国は所々で雨。中国～北日本では日中は概ね晴れ。前橋市でウグイス初鳴。



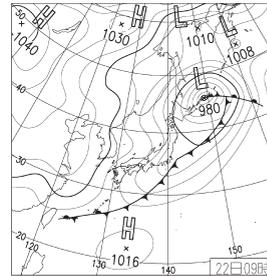
19日(火)九州で猛烈な雨
 九州付近の低気圧が日本の南を東進。西日本は雨で雷を伴う所もあったが夕方以降は次第に晴れ。東～北日本は概ね晴れ。鹿児島県尾尾間の80mm/1hは3月1位を更新。



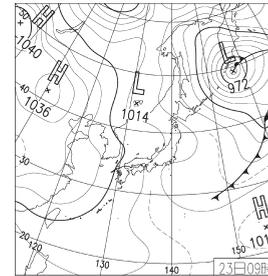
20日(水)長崎市でサクラ開花
 日本付近は広く高気圧に覆われ沖縄～東北は晴れ。西日本は前線の接近で夜には雨の所も。全国的に4～5月並の最高気温。長崎市では全国で最も早くソメイヨシノが開花。



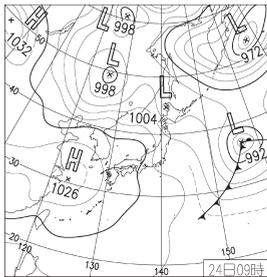
21日(木)サクラと春一番
 日本海の低気圧の影響で全国的に風が強まり、九州南部・奄美地方と中国地方で春一番。最高気温も上昇し徳島県穴吹で27.3℃など初夏の陽気。福岡市、横浜市、東京でサクラ開花。



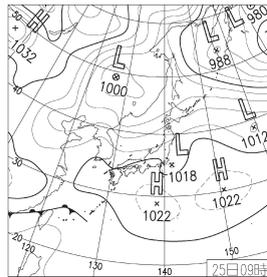
22日(金)続々とサクラの便り
 低気圧が千島近海に進み、次第に冬型の気圧配置に。北陸や北日本は所々で雪や雨。南西諸島も一部で雨。宮崎市、松山市、高知市、広島市、名古屋市、岐阜市サクラ開花。



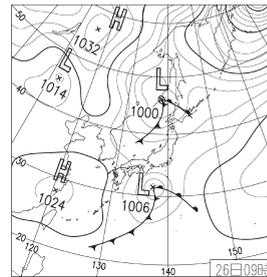
23日(土)全国的に寒の戻り
 冬型気圧配置が続く。上空約1500mでは-6℃の寒気が西日本にまで南下。山陰～北日本は雪や雨。四国、関東も一部で雨や雪。青森県酸ヶ湯で34cmの日降雪量。佐賀市サクラ開花。



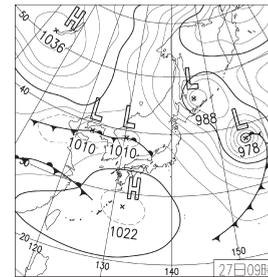
24日(日)大分市でサクラ開花
 北海道付近を通過した低気圧や寒気の影響で、山陰～北陸と北日本は雪や雨。その他は東シナ海の高気圧に覆われ晴れや曇り。全国的に最高気温が低く、北日本では真冬並の所も。



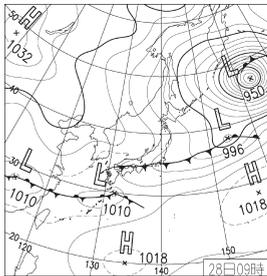
25日(月)九州・四国は次第に雨
 東シナ海に発生した低気圧の影響で、沖縄・奄美は雨で雷を伴い激しく降った所も。九州は午後には雨となり次第に四国や近畿南部も雨に。北日本は気圧の谷が通過し所々で雪や雨。



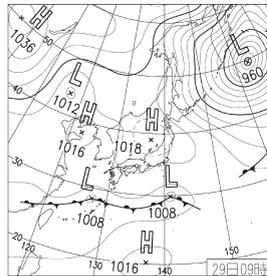
26日(火)西日本各地サクラ開花
 日本の南を低気圧が東に進み、西日本～東日本の太平洋側は午前中雨。サハリン付近の低気圧や前線の影響で北陸や北日本で雨や雪。熊本市、高松市、松江市、鳥取市サクラ開花。



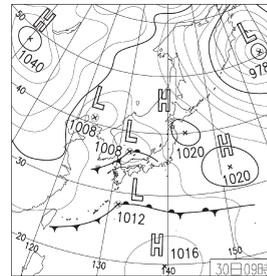
27日(水)東京でサクラ満開
 低気圧や寒気の影響で北陸や北日本は雪や雨、夜には雷を伴う所も。その他は高気圧に覆われ概ね晴れ。岡山市、神戸市、大阪市、京都市、甲府市、前橋市、水戸市でサクラ開花。



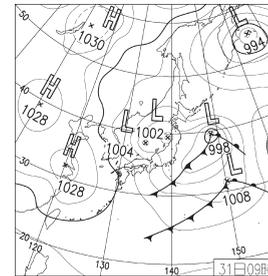
28日(木)北陸でもサクラ開花
 寒冷前線が西～東日本を南下。また、停滞前線上の低気圧が日本の南を東進。全国的に曇りや雨、北日本は雪。新潟県高田の13.5mm/1hは、1922年の統計開始以来3月の1位の値。



29日(金)奈良市でサクラ開花
 前線上の低気圧が東シナ海と日本の南を東進。沖縄・奄美や九州南部は雨。その他は晴れや曇り。沖縄県奥の日降水量127mmは3月1位の値を更新。福岡市、高知市サクラ満開。



30日(土)日本付近に低気圧2つ
 南西諸島～東北は低気圧や前線の影響で広く雨や雪。北海道は高気圧に覆われ概ね晴れ。冷たい北東の風が吹いた関東や東北太平洋側では最高気温が上らず、1月下旬並の所も。

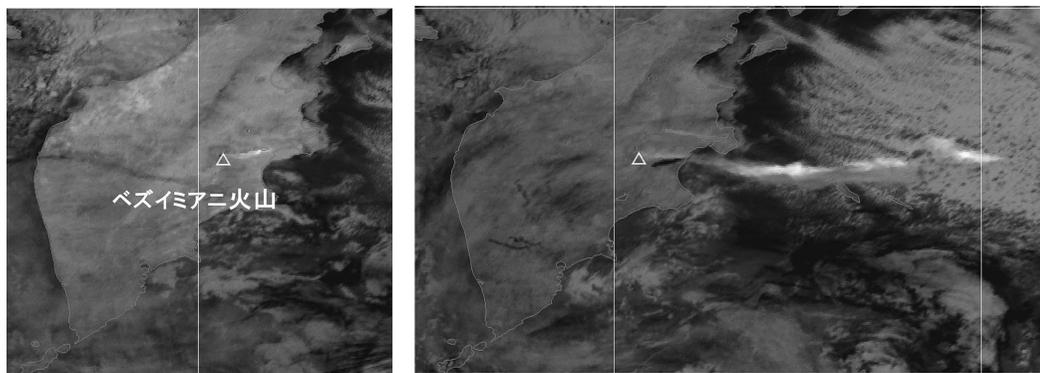


31日(日)西日本でも降雪
 低気圧や前線を含む気圧の谷は東に進み次第に冬型気圧配置。本州を中心に雨や雪。強い寒気が入り鳥取県大山で11cmの降雪。東北では最高気温が平年より10℃前後低い所も。

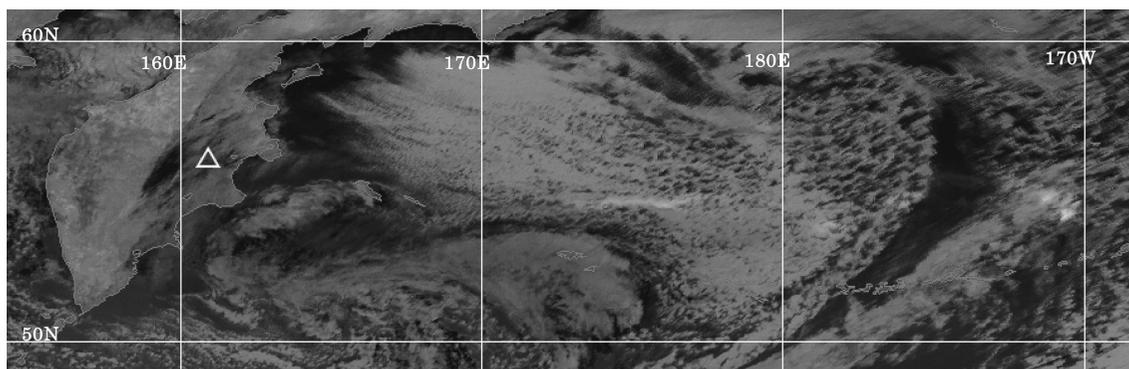


今月のひまわり画像—2019年3月

ベズイミアニ火山の大規模な噴煙



第1図 2019年3月16日の赤外差分画像 04時（左図）と09時（右図）（日本時間）。



第2図 2019年3月16日21時の赤外差分画像。

ロシアのカムチャツカ半島には多くの火山が存在する。その中のベズイミアニ火山（標高2,822m）が2019年3月16日未明（日本時間）に噴火した。その様子が衛星画像でよく見ることができた。第1図は同日04時と09時のカムチャツカ半島からその東海上における赤外差分画像である。赤外差分画像は、波長帯10.4 μm （Band13）から12.4 μm （Band15）の等価黒体輝度温度の差を画像化している。12.4 μm の波長帯は火山灰や黄砂に多く含まれるケイ素による影響を受けることから、10.4 μm との輝度温度の差が負（マイナス）の領域は、画像では明るい（白い）領域として見える。同図から白い領域（火山灰）が東へ流されており、噴火直後から同日09時までのおよそ5時間の移動から、その速度は約55kt（1kt \approx 0.51m/s）と推定できる。気象庁全球モデル（GSM）の風速から、その高度は400hPaにあたり、衛星画像から確認できる程

度の濃さを保った噴煙が少なくとも7kmくらい上空まで達し、運ばれていったとみられる。同日21時の赤外差分画像（第2図）では、噴煙は西経170度付近に至るおよそ1,800kmの距離にわたって確認することができた。

カムチャツカ火山観測所（KVERT）によると、噴煙は上空15kmにまで達していた。このような情報が発信されるのも、火山灰は日常生活に大きな影響を与えるからである。特に航空機のエンジンに火山灰が吸い込まれると、出力停止するほどの重大な事態を引き起こすおそれがある。2010年のアイスランドのエイヤフィヤトラヨークトルの噴火では、火山灰が広範囲にわたって上空に滞留し続けたため、欧州全体に交通麻痺を引き起こしたのは記憶に新しい。

（気象庁予報部予報課 河野麻由可）